

R6 総括コメント（美術学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
日本画	教授	岡田 眞治	5ヶ年計画の長久手、長篠合戦図屏風復元模写も無事に完成させることができた。数多くの展覧会を開催することができた。学生参加の展覧会を企画、開催した。
日本画	教授	井手 康人	院展の審査・研究会は充実した内容にする事が出来た。 本年より、小学校で支援学級、また、家庭内暴力の保護施設でワークショップを行うことが出来た。
日本画	教授	清水 由朗	研究、教育活動においては、自身の研究を効率よく還元できるよう心掛けた。また大学運営では特に文化財保存修復研究所所長として、また社会貢献では、公益財団法人日本美術院及び東京富士美術館において、大学教員としての特性を活かした活動等を行なった。
日本画	准教授	吉村 佳洋	制作研究においては院展への出品が叶わず、反省すべき点である。次年度においては計画的に制作を行いたいと考える。グループ展等での発表においては、自身の研究内容を客観的に考察する事が出来た。 教育活動、大学運営、社会貢献においてはその役割を十分に果たせたと考える。
日本画	准教授	岩永 てるみ	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献共に当初立てた自己の計画を概ね達成出来たと考える。
日本画	准教授	阪野 智啓	日本画制作は院展入選以外にめばしい活動がなかったが、研究では継続して取り組んできた金箔製造史について学会発表、論文投稿、伝統箔協会との研究提携など、成果が大きかった。教育では学部カリキュラムを中心に部会から指摘のあった問題点の修正と併せ、より効果的な授業編成の整理を目指しているが、まだ見直す必要があると感じる。来年5月の東大展覧会を成功できるよう、準備を進めていきたい。
油画	教授	倉地 久	研究・教育・運営・社会貢献に対して、バランスよく自身が努力し本務を遂行できたと考えている。特に、副学長・教研審メンバーとして、大学運営と業務に昨年より努力できたと考えている。
油画	教授	額田 宣彦	・研究活動～目標を達成、研究を深めることができた。・教育活動～ゼミ、作品講評会、討論会、レクチャー等を全学年に渡り実施。学生の自主性、思考力、実践力を育めた。学生研究アトリエが狭く拡張の必要性を感じた。・大学運営～当初計画より業務が大幅に増加しストレスを感じた。時間を取られ研究活動、教育に支障があった。次年度は研究と教育に時間を注ぎたい。・社会貢献～「GROUND4」企画検討。記録集助成金取得（日東財団）、作成中。
油画	教授	井出 創太郎	腐蝕銅版画を基軸としたプロジェクト『落石計画』は、コロナ禍に一時休止していたが昨年度再開し、2024年8月に「第14期」として実施し、本格的に継続再開する年度となった。岐阜県飛騨市宮川町種蔵集落での展覧会『光射す器/種蔵の影』は4年目を迎え、5年継続とした当初計画の貫徹に向けた充実した展覧会内容となった。両プロジェクトは研究室の基軸となる活動であり、更に充実した活動としてゆく所存である。今年度当初に発足した、青山学院大学の教員・学生と井出研究室で協働・研究する「コミュニティ情報継承研究会」は、コミュニティ情報の継承を掲げ、岐阜県の補助金事業として種蔵集落を実施場所とし、着実な成果を上げた。来年度も本研究会を継続実施とし、事業成果の充実を図りながら、展覧会『光射す器/種蔵の影』の補強、導き手となる研究内容となるよう充実した活動として展開してゆく。
油画	教授	高橋 信行	ベイスギャラリー（東京）での個展、市民ギャラリー矢田でのグループ展と積極的に研究発表を行った。その後も新たなテーマを設け精力的に研究活動を行なっている
油画	准教授	増田 直人	計画した研究活動、社会貢献は実行 満足出来る。 4月個展で中日新聞に掲載された内容からも研究成果が出ている。 研究は、中部国画会事務局の責任者として多忙の中、アクリル絵具の研究、複数の展覧会に作品を出品出来、自己評価出来る。

油画	准教授	大崎 宣之	研究ではグループ展での作品発表（４件／国内１・海外３）や助成金の採択など充実した研究活動を行なった。大学運営では将来計画委員委員長および工房委員委員長の２つの委員会の委員長の活動、また、社会貢献活動として「ハンプルクと大阪の姉妹都市35周年記念 特別展示」の企画協力やハンプルクでのワークショップを開催し、充実した活動をおこなった。
油画	准教授	猪狩 雅則	施設課委員会では、３期工事以降の工事期間中代替場所不足について様々な問題が噴出し、それらを解決するべく委員会全体で様々な角度から検討した。全ての問題が解決に至っていないため、継続して勘考していきたい。博物館学課程委員会、教職課程委員会では、リトルワールドへの引率、各高校/中学への特別授業訪問など対応し、委員会運営に参加できてきたと感じている。学生の指導は、相変わらず難しさを感じているが、学生の特性を見極めながら、対応できてきたように思う。
油画	准教授	安藤 正子	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献の全てに於いて、全力で取り組みました。来年度以降も引き続き積極的に取り組みたいと思います。
油画	准教授	平川 祐樹	今年度は研究・大学運営の一環で数回海外渡航し、交際的な現代アートの見識を深め、各国の研究者・アーティストとの交流を深めることができた。コロナ禍以降、より重要になっているアジア圏の現代アートの動向を引き続き注視してゆきたい。
油画	准教授	横山 奈美	本年度は、研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献の各分野において取り組むことができた一年だった。研究面では、多数の展覧会やイベントに参加し、発表の機会を得たことで、専門性を深めるとともに外部との交流を広げることができた。教育活動においては、学生の研究課題への理解を促し、思考力や表現力を伸ばす指導に努めた。大学運営面では、委員会業務に関与し、円滑な運営に寄与した。社会貢献に関しても、トークイベント等を通じて大学外の場での発信を強化した。今後も研究の深化と教育の質向上を図りつつ、より広い社会との連携を模索したい。
油画	講師	田中 藍衣	グループ展、個展とそれぞれに向けて行なった研究は、自身の研究内容を前進させるものとなった。 また、次年度に東京と大阪で行う個展に向けた制作も行うことができ、研究活動の充実が見られた。
彫刻	教授	高橋 伸行	自身の研究活動では、甚大な被害があった被災地に赴いて災害支援NPOと社協との連携でアートプロジェクトを展開し、その活動内容を紀要54号にまとめることができた。2010年の初回から継続している瀬戸内国際芸術祭関連の事業についてもその土地の土を使った器の製作に着手し、将来につながる取り組みを展開することができた。また学内においては所属する委員会の多くが長寿命化に伴う調整が課題となり、専攻を代表して積極的に関わることができた。専攻においては新しい専攻棟での新カリキュラムの運営、新しいプログラムの運営に専攻議長としてリーダーシップを取ることができた。
彫刻	教授	竹内 孝和	教育活動および大学運営においては、概ね良好な成果を得ることができた。研究活動では、ドイツの美術館施設においてアーティスト・イン・レジデンスを実施し、その成果を同美術館で発表した。現地の作家や美術館関係者と密接なコミュニケーションを図ることができ、今後の展覧会につながる有意義な成果を得ることができた。今後も、さまざまな試作や素材研究を行い、チャレンジ精神に富んだ作品制作に取り組むとともに、学生にとって刺激となる表現の探求を続けていきたい。
彫刻	教授	森北 伸	各項目について、概ね達成出来た。 令和６年度は新彫刻棟の運用について大きな問題・事故等が無く、また学部授業カリキュラムの大きな変更の年だったが、そちらも上手く運用出来た。
彫刻	准教授	村尾 里奈	今年度は、彫刻専攻の新たな校舎である彫刻棟で、新カリキュラムがスタートしました。大学運営では新たに始めたオープンスタジオの運営や、金属による彫刻制作ができる金工房の整備に努めました。教育活動では、ギリシャでの研修を経て東西の彫刻の起源について理解を深め、古美術研究の教育に活かすことができました。研究活動では、カーasteenレスによる彫刻制作の研究を継続し、「カーasteenレスによる制作研究－ベンガラ色への挑戦－」と題した論文を紀要に投稿しました。
彫刻	講師	葉栗 里	教育活動や大学運営に関しては、専攻の先生方からサポートをいただきながら取り組んだ1年間でした。研究活動については、多くの作品発表の機会を得るとともに評価もいただくことができたため、今後も作品制作を中心に取り組んでいきたいと考えています。

彫刻	講師	迎 英里子	計画に沿って研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献の取り組みを行うことができた。 特に研究活動では今年度は5件の展覧会に参加し積極的に成果を発表した。
芸術学	教授	小西 信之	昨年に続き西洋美術史教員が不在の中、非常勤の先生を複数依頼し西洋美術史の学生への指導を依頼し、専攻全体として無事に運営できたと思う。芸術資料館館長兼社会連携センター副委員長を始めとする多数の委員会の仕事は大変で、さらに長寿命化工事に伴う資料館収蔵庫移転という大仕事の計画を学芸員とともに策定、調整に苦慮している。アートラボアイチで油画教員横山奈美先生と共同企画展《Beyond A and Z》展を行えたことは良かったと思う。次年度は、自分の最終年となるが、何よりも収蔵品の無事の移転というこの大仕事に注力し、専攻の円滑な運営にも努めていきたい。
芸術学	准教授	本田 光子	本年は科研費による研究成果を『源氏絵研究の最前線』（稲本万里子編著、勉誠社）に3本の論文として掲載したほか、海外作品調査の成果を紀要へ投稿した。留学生を含む大学院生・学部生・研究生の指導の傍ら、学生委員長としての職務を全うした。芸術講座「災害と文化財」のコメンテーター、豊明市での生涯学習講座などを務めた。研究・教育・業務・社会貢献全ての面で充実した一年となった。
芸術学	准教授	金子 智太郎	専攻内の業務や多くの委員会に携わり、教育・研究環境の改善に尽力した。また、芸術講座やイベントの開催などを通じて、学外との交流も図ることができた。反省すべき点はあるが、おおむね目標を達成できた。
デザイン	教授	柴崎 幸次	概ね順調に実施できた。特に、研究や展覧会活動に関して、海外での発表や調査研究、科研費の進行など、順調に進めることができた。
デザイン	教授	佐藤 直樹	昨年度に引き続き芸術教育・学生支援センター長を務めたことで、大学運営の分野における活動実績が充実したのみならず、任務に伴い「県立大学との教育連携」「他芸術系大学とのFD活動」「海外大学との学術交流」「社会事業への参画」等に関与する機会が生じたため、各項目にわたって年度当初の目標を大きく上回る成果を達成することができた。 その結果自体は諒とするが、眼前に積まれた案件を処理することで手一杯の一年だったと言えなくもない。次年度以降においては、より野心的な目標設定のもと新規挑戦分野の開拓と達成を試みたい。
デザイン	教授	本田 敬	社会連携授業では学生と共に地域の方達と、研究者としては企業やデザイン関連団体とデザインの理解、普及において活動を進めることができた。3年ほど前から取り組む専攻カリキュラムの改革が、教育活動や社会貢献に連動し始めたことを実感する年度となった。
デザイン	准教授	夏目 知道	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献、共に積極的に取り組むことができた。
デザイン	准教授	春田 登紀雄	アントレプレナーシップ教育、環境分野での新商品企画、児童向け環境教育、伝統工芸の振興、研究発表活動などの研究において、国内外の自治体・教育機関・企業との関係者と協働しました。これらを次年度以降も継続・発展させ、教育・産業・生活文化の発展に貢献してまいります。
デザイン	准教授	望月 未来	今年度から他校での非常勤講師を再開しました。本務校の内外問わず様々なバックグラウンドの学生との対話を行う中でデザインや教育に関してより広い視野を持てるようになった一年であったように感じます。
デザイン	講師	和 祐里	【教育活動】 昨年から継続の授業においては進行等の改善をしたこと、今年度新たな担当授業においては学外との関わりを多く創出し、学生の大きな成長を実感することができた。【大学運営】 オープンキャンパスに関わる広報物に携わり、多くのメンバーと協力をしながら魅力的な制作物を模索することができた。【社会貢献】 外部機関での審査員を務め、芸術の魅力を発信することに貢献した。
陶磁	教授	梅本 孝征	年度を通して研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、成果を得ることが出来た。特に秀でた成果として陶磁専攻「芸術表現コース」の課題として古川美術館との産学連携事業が挙げられる。

陶磁	教授	長井 千春	今年度も美術学部長として大学運営全般に尽力した。本学の長寿命化工事に伴う授業のための施設不足問題について、従来の全学施設整備委員会のほかに、美術学部施設整備委員会を新たに組織し問題解決に努力した。さらに昨年度より継続して全学カリキュラム委員会で専門教育及び教養教育に関するカリキュラムの見直しに取り組んだ。また、陶磁分野の教育においては、博士後期課程の学生4名を指導した。うち3年生1名が本審査に臨み、学位申請論文は博士基準を満たすものと審査員に評価され、学位授与が確定した。陶磁専攻と韓国の連携校ソウル科学技術大学とのMOA協定を見直し、本学初となる単位互換を可能とするMOU協定を新たに締結した。神戸財団受託事業として、「陶磁教育・作品交流展」を代官山蔦屋書店で開催した。陶磁専攻教員が主体となり8芸術系大学陶磁専攻・学科の学生及教員133名が出品した。
陶磁	教授	崔 宰熏	研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献全てにおいて積極に取り組む目標以上の成果を達成した充実した一年でした。 ・研究活動において、権威ある2024京畿世界陶磁ビエンナーレ国際公募展にて作品「MUSUBI-縁-」がGCB賞を受賞、京畿生活陶磁美術館にて展示されました。難易度の高い鋳込み成形や下絵を初め様々な加飾表現を研究、制作に取り組み、「MUSUBI」、「MUSUBI」、「Suikao」などインテリアオブジェとしての花器を国内外での展示発表やコンペに出展することができました。 ・教育活動においては、韓国ソウル科学技術大学との交換留学に関わるMOA協定採決に貢献し、2026年度より実施する運びになりました。韓国ソウル科学技術大学との交流事業の一環として両校の学生作品展を企画・運営をし、本校芸術資料館にて展示・講評、交流を行いました。韓国ソウル科学技術大学にて「Global Capstone 作品展」の作品講評と特別講演を行いました。「デザインシンキング」授業でのワークショップをグレードアップさせるなど担当科目において常に内容と質を高める取り組みができました。企画参加した「神戸財団 陶磁教育・作品交流展 Book and Work」を代官山蔦屋書店にて開催しました。全国8大学からの学生と教員による133点の作品が展示・発表され、多くの来客者に各大学の陶磁の取組みを伝えることができました。LIXIL ショールーム名古屋と連携で開催される「暮らしを彩るやきもの」展を指導し、学生本人が制作した作品が生活空間でどのように展示され、生活者はどう感じるのかを、学生主導で展示企画・開催する仕組みを作り、実践的な学びの機会をつくりました。好評のため今後継続的に取り組むこととなりました。 ・社会貢献として産学連携プロジェクトやコンペ、国際交流などにも積極的に取り組むことができました。特に国際陶磁器フェスティバル実行委員会と京畿世界陶磁ビエンナーレ主管機関である韓国陶磁財団との事業協力・交流に架け橋的な役割を果たすことができました。 以上のことを踏まえて更に全てにおいて貢献していきたいと思います。
陶磁	准教授	田上 知之介	計画していた研究活動を実践することができました。次年度は、社会性を意識した個の研究活動に注力し、教育に反映させられるよう努めます。また教育活動においては、特に産学官連携事業をはじめとした学外での活動に積極的に取り組みました。学外の視点を織り交ぜながら丁寧な指導を行い、質の高い教育・研究成果を出すことが出来ました。
陶磁	准教授	佐藤 文子	令和6年度の計画に沿って各事項ともに積極的な取り組みを行うことができた。研究制作活動としては、名古屋工業大学との交流事業において、デジタル技術を活用して陶芸素材が変化していく様子を可視化する取り組みを行った。「やきものの魅力」の伝え方の可能性を模索することができた。今後も陶芸教育の取り組みに活かして行きたいと考えている。次年度においても引き続き、陶磁原料や釉薬分析による多岐にわたる陶芸表現の可能性を探究していきたい。
陶磁	准教授	小枝 真人	本年度は、学生達の創造力を出来るだけ引き出すことを目標に指導しました。全体的に一定の成果は上げられたものの、学生達のさらなる創作技術の向上が必要であり、自身の指導努力が必要であると感じています。 また自身の研究においては、造形と加飾（研究テーマ）に関する研究を進め、個展や公募展にて成果を発表することが出来ました。 次年度は教育活動において、より多様な表現方法に対応できる指導を目指していきたいと考えています。 また、ワークショップの開催など社会に向けた研究活動から新たな学びを積極的に取り入れたいと思っています。

メディア映像	教授	森 真弓	昨年度に引き続き、社会及び地域連携を含めた社会貢献活動と、大学院開設に向けての準備に関わる活動に尽力した。また、音楽美術協働プロジェクトである共鳴〜Kyo-meいでは、教育プログラムの成果を実際のイベントに反映し、広く発表した。
メディア映像	教授	有持 旭	作品はいくつかの国際映画祭で上映される機会に恵まれ、今年度は5カ国で上映された。その一方で、今年度は理論研究の活動に重点を置いた。鹿島美術財団の助成などいくつかの外部資金と学内の支援を得られたことで、欧州で開催された国際会議、および国内の学会での研究発表、大学が主催する国際交流事業や芸術講座によって、現代アニメーション文化に関するリテラシーの向上を進めることができたと感じている。また、それらによって、海外のいくつかの大学と交流を深めていく基盤を構築することができた。
メディア映像	准教授	池田 泰教	本年度はシアターでの作品上映、展覧会、上映会企画を実施することができた。どれも外部から発表の機会をいただいて実現したものが多い。中でも浜松での上映会企画は3年ほど継続できており、地方都市ではなかなか観る機会がない実験的なドキュメンタリー作品や映像表現を紹介するという当初の目的にとどまらず、様々なバックグラウンドを持つ観客との対話の中から私自身も制作実践上のヒントをいただく貴重な機会になっている。研究プロジェクトでは科学研究が2年目を終え、徐々に目に見える成果が出始めている。複数の小実験とリサーチを繰り返しながら、着実に課題をクリアしており、現在では3年目の開発課題に向けての道筋が明確になっている。教育活動については3年生への個別の演習指導や外部発表へのサポートなども実現でき、手応えを感じている。
メディア映像	准教授	八嶋 有司	研究活動では、作品の発表や、研究発表、科研費の申請など大きな目標は達成された。しかし、研究/教育に関する部分において、学生と協働した研究や制作への取り組みを行うことができなかった。次年度からはゼミの学生も増えることから、プロジェクトベースで取り組む、実践的な研究及び教育を展開させることを目標にする。社会貢献においては、特に初等教育に貢献できるよう力を入れていきたい。企業と連携して得た知見や新しい技術を教育/地域へ還元できるような仕組みを考え、制作及び研究を発展させる。
教養	教授	清道 正嗣	予定外のこともあったが、おおむね計画通りに実施できた。
教養	教授	石垣 享	継続的な研究活動により全国レベルの学会の役員に選挙で選出された。これにより、地域の研究会の理事長を断ることになったが、研究を通じた社会貢献は十分以上に達成されている。次年度の授業内容の見直しのための科学的な検証が行え、授業でのICT活用を推進させることができた。また、音楽博士前期課程の学生の修士論文の実験と論文指導をボランティアで行った。これらにより、教育に関しては、目標を超える達成度であった。今年度の大学運営で最も精力的に活動したのは、県大との2大学連携であり、理事長および両学長より、次年度から実行可能な連携授業の打診を受け、この実現の為にアイデアを出し、精力的に具体的な提案を行った。この分野においても十分に目標を達成したものと考えている。
教養	准教授	数森 寛子	語学教育については、他大学（東京・国立）の大学院入試のためのフランス語翻訳を指導し、合格者を出すことができた。また、実用フランス語検定準2級に2名、4級に1名が合格した。フランス語を研究の専門としない学部生が十分な成果を上げてくれたことをとても喜ばしく思っている。